三十年ぶりの夜行寝台

内田　満夫

東京での同級会のあと、神戸への帰りに夜行寝台列車に乗ってみることを思いついた。

いま定期運行中の夜行列車は、東京と出雲市・高松間を結ぶ寝台特急「サンライズ」ただ一つしかない。いずれ廃止の運命にあるだろうから、今が乗り納めの頃合いだ。夜行列車に乗るのは会社員現役時代以来だから三十年ぶりとなる。

晩秋の一日を級友と旧交を温めたあと、都電荒川線乗車、九十九里浜・犬吠埼立ち寄りなどの旅程を済ませて、わくわくしながら二十一時五十分東京駅発のサンライズ号の入線を待った。

会社員現役の頃は、国内各地への出張に夜行寝台列車をよく利用した。当時の勤務は東京、神戸間の行き来が頻繁だったので、東京・大阪間を走っていたブルートレイン便・寝台急行「銀河」は特に重宝した。この列車については忘れられない思い出がある。

神戸でのひと仕事を終えて翌日の東京での会議に向かうある夜のこと、神戸在住の仲間との打ち上げはいやがうえにも盛り上がり、つい長居をしてしまった。最寄りの灘駅発の普通電車の時刻は念頭にあったのだが、どうも一便乗り遅れたようだ。二十三時十分の大阪駅発車時刻には間にあいそうにないことがわかって、酔いの回った赤ら顔もさぞ青ざめていたことだろう。

困ってしまって、電車が駅に停車したタイミングで車掌室に助けを求めた。事情を話すと車掌はすぐに、どこかに電話連絡をとりはじめた。寝台券？　持っておられます、内田さんとおっしゃいます、ハイ、そうですか、わかりました、よろしくお願いします、なんて会話が耳に入ってくる。そして車掌から、その電車の最後尾車両のいちばん後ろのドアから降車するように指示される。

電車が大阪駅に着いた。ドアが開く。駅員が二人待機していたようだ。内田さまはどちらですか！　口々に叫びながら突進してくる。二人は私から荷物を奪いとるやいなや、ホームを走る。それについてこちらも走る。階段を駆けおり、いちばん端の十一番線の階段を駆け上がり、やっとのことで停車している車両に飛び込んだ。

乗り込むと同時に列車が動きだした。「接続列車の関係でご迷惑をおかけしました。東京行き寝台急行銀河、ただいま定刻を四分遅れて発車いたしました……」。車掌や駅員の示してくれた厚意の快い余韻がしばらく全身を満たしていたが、そのうち眠りに落ちた。

東京駅九番線ホームに姿を現わしたのは電車式寝台列車だった。勝手に描いていたブルートレインとは、列車の雰囲気も客室のつくりも全然違った。私は竜宮城から帰った浦島太郎のような気分で、それでも憧れの夜行寝台列車に嬉々として乗り込んだのだった。